

「分析化学」誌の役割



梅 村 知 也

伝統ある分析化学誌の編集理事を拝命して早いもので2年が経ちました。経費削減のための改革を推し進めるようにとの意向を受けて、就任早々に金澤委員長の下で投稿論文のテンプレート化に踏み切るなど、かなり荒っぽい変更を強行してきたにもかかわらず、会員の皆様のご助言とご協力を頂き、なんとか毎月1回の発行を続けてこられたことに改めて感謝する次第です。

さて、冒頭に“伝統ある”と書きましたが、分析化学誌は日本分析化学会の発足(1952年)とともに刊行された今年で66年目を迎える雑誌です。創刊以来のすべての論文・記事はJ-STAGEで読むことができ、過去の巻号を調査してみると、1957年には今と変わらない月刊誌の体制が築かれていることが分かります。ちなみに、1巻1号を覗いてみると、当時の分析化学会の勢いが窺えます。後の分析化学会の会長はもとより、日本化学会や薬学会、地球化学会の会頭、会長を務められた先生方の論文がずらりと並んでいます。もちろん、この創刊号には企業の研究者の論文も多数掲載されており、産学の研究者が一丸となって分析化学会を盛り上げていこうという意識が感じられます。和文誌として認識されている分析化学誌ですが、Analytical Sciences誌が発刊される以前には、英語論文が掲載されていた時期もありました。例えば、“全盛期”と私が勝手に呼んでいる33巻1号(1984年)には、25報の論文が掲載されており、そのうちの9報が英文で書かれています。25報もあれば“雑誌が立つ”のでは?と想像するだけで、編集理事としては大変羨ましく思えてきます。2017年現在、66巻1号の掲載数は6報です。背表紙に文字を書けるだろうか和我々編集委員会メンバー、そして事務局の佐藤さんは心配の毎日なのです。分析化学誌への皆様のご投稿を心からお待ちしております。

日本語で書かれた論文は初学者にとって非常に心強いものだと思います。私の学生時代の原口研究室(名古屋大学)にはAnalytical Chemistry誌とともに分析化学誌の冊子体も大事に保管されていました。英語論文を読むことに抵抗があった私は、まずは分析化学誌に掲載されている論文を読み、専門用語の使い方を学んだものです。そして、その著者が書かれた英文(日本人英語というのでしょうか。読みやすい!)を読み、英語論文の書き方を学びもしました。今しがた、卒論生の上を見たら、分析化学誌の総合論文がプリントアウトされていました。ちなみに、分析化学誌では、アクセスランキングナンバーワンを調査していますが、その上位はいつも分析化学総説と総合論文が独占しており、こうしたトップランキングの論文は年間1000回以上も閲覧されているのです。いつの時代も、分析化学誌は若手研究者、技術者の心の支えなのだと思えます。

さて、ここで話題を分析化学誌の表紙に移したいと思います。今年のぶんせき誌の表紙は、創刊以来の毎年の表紙絵(1975年から43年分)がずらりと並べられていましたが、一方の分析化学誌の表紙は単色刷りが慣例です。六十数回目ともなると選べる新色はほとんどありません。我々編集幹事会メンバーは毎月1回、五反田の学会事務局で編集作業を行っているのですが、2時間を超える編集会議で疲れ切った中で表紙カラーを選ぶのは大変です。そんな憔悴しきった我々の目に飛び込んできたのが金澤前委員長のバックでした。「この色はかつて見たことがない!」ということで決定したのが今年のショッキングピンクでした。さて、そうしてまた1年が過ぎて次のカラーを選択する時期がやってきました。ショッキングピンクに負けないインパクト。難題です。暗然たる気持ちのなかブラックが案として浮上ってきます。重厚な人柄の次期委員長(渋川先生)とよく合うのではないかとということで選ばせていただきました。この原稿が出る頃には渋川委員長の下、新体制がスタートしています。これからも変わらぬご支援ご協力をよろしくお願い致します。

[Tomonari UMEMURA, 東京薬科大学生命科学部, 「分析化学」編集理事]